ルツェルン音楽祭で空前の成功を収めた藤田真央。リッカルド・シャイー＆ルツェルン音楽祭管弦楽団とのラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」©Priska Ketterer / Lucerne Festival

Report & Interview

絶美のラフマニノフ
―藤田真央 in ルツェルン

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

世界規模での活躍、その大きな一歩となるソニー・クラシカルとの専属契約が成されたのは昨年11月。いよいよその最新録音がお披露目となる
©ソニー・ミュージックレーベルズ

Mao Fujita in Lucerne Festival

スイス夏の風物詩、ルツェルン音楽祭に人気ピアニスト藤田真央がデビューを飾り、ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」の名演で聴衆を熱狂の渦に巻き込んだ。そんな演奏会直後の興奮冷めやらぬ藤田にインタヴューを実施。10月に発売予定のソニー・クラシカルからのデビュー・アルバムの話題とあわせてうかがった。

もう一度同じようには弾けない

8月13日、藤田真央がルツェルン音楽祭デビューを飾り、聴衆を興奮のあまり総立ちにさせた。この日はヴァレリー・ゲルギエフがマリインスキー劇場管弦楽団を指揮する予定だったためか、空席が目立ったルツェルン・カルチャー・コングレスセンターだが、ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第2番」冒頭から燃えるような音を絞り出す藤田の集中力が客席を支配した。そんなエネルギーを包み込んで中和させるようなリッカルド・シャイー率いるルツェルン音楽祭管弦楽団もそのうち熱を帯びていき、藤田のピアノをかき消してしまう部分もあった。しかし全曲を通して、オーケストラとの対話や、共に溶け合うような藤田のピアノは、真の意味での「協奏曲」として耳と心へのご馳走になった。とくに第2楽章で顕著なように、藤田の「歌わせる」ピアノは心を撫で、震わせてくれる。人の声に近い管楽器よりも歌心のあるフレージングを、打楽器のように音が減衰するピアノで紡いでいく藤田を、聴衆は惜しみない拍手で迎えた。

終演後の藤田は、開演前の緊張を初対面の私に飾らず語ってくれた。

「前日、アンネ=ゾフィー・ムターの演奏を初めて聴いたのですが、本当にすばらしい音だったのに、速いパッセージでたった1回オーケストラと合わなかっただけで、客席からため息が聞こえ、アンコールもさせてくれなかったんです！そんな厳しい聴衆の前で弾くのかと思ったら、いつも以上に緊張して大変でした。心臓の鼓動が速かったせいか、オーケストラのテンポが遅く感じられて……」

そんなハイ・テンションから一夜明け、翌朝はリラックスした様子でインタヴューに応じた藤田は、「もう一度同じようには弾けない」「たまたまあいう演奏ができてよかった」と振り返る。「前世できっとたくさん社会貢献したから、今生はこんなに運がよいのだと思う」と言うが、与えられたチャンスを成功に導くのはもちろん彼自身の資質と努力だ。

モーツァルトと私自身との共通点も感じます

「ルツェルン音楽祭は自分にとって、今年いちばん大きな位置付けでした。それも、ロシアのウクライナ侵攻がなければ、招かれることはなかったのです。今年の3月にミラノ・スカラ座でゲルギエフと弾くはずだった協奏曲をシャイーが代わり、そのリハーサルの初期段階で、『おもしろい音楽性と歌心があるね。第2番も弾けるの？（※注：このときのプログラムはラフマニノフの第3番だった）』と聞かれ、演奏会翌日には今回のルツェルン音楽祭オファーをもらったのです。さらにその1週間後には、同曲で来年ロイヤル・コンセルトヘボウ管弦楽団と共演することが決まりました。シャイーは、『君にはいずれ会っていただろうけれど、早くに会えてよかった』と言って、孫のように大切にしてくれます。昨日も、『君がすばらしいのは、すべての音が自然に表現できているところだ。ラフマニノフというと、皆アタックを効かせることばかり考えるが、本当は歌が命なんだ』と褒めてくれました。ラフマニノフは楽譜に、どう歌えばよいかを丁寧に書いているし、本人の演奏も録音として残っているので、ロマン派の流れを再度盛り返す意図があったことなど、わかるんですけどね」と研究者の顔も見せる。

そして昨年ソニー・クラシカルと、日本人ピアニストとして初めて専属レコーディングのワールドワイド契約を結び、来たる10月に世界デビューCD、モーツァルト「ピアノ・ソナタ全集」が発売される。クララ・ハスキル国際コンクールやチャイコフスキー国際コンクールで弾いたモーツァルトが審査委員たちに認められ、彼らからヴェルビエ音楽祭にアカデミー生として呼ばれた末にソナタ全曲演奏を勧められたり、また彼らがゲルギエフに連絡してくれたり、とモーツァルトは藤田にチャンスをもたらした作曲家だ。

「録音のためにモーツァルトを徹底的に勉強したおかげで、チャイコフキー・コンクールの後に乱雑になっていた部分を修正できたし、作曲時の彼と同じくらいの年齢で全曲を弾けたのは貴重な体験でした。茶目っ気や他の人のしていないことを盛り込むところなど、私との共通点も感じます。このCDが胎教に使われたら嬉しいな。全国の図書館に置いてほしいです！」と目を輝かせ、次は協奏曲のCD、そのうちフランスの匂いのするものも……と勢いに乗っている藤田を、これからも追いかけていきたい。

モーツァルト「ピアノ・ソナタ全集」〔第1～18番〕
ソニー・ミュージックから豪華6枚組ボックスとして10月5日に発売予定［S-SICC30603～8］